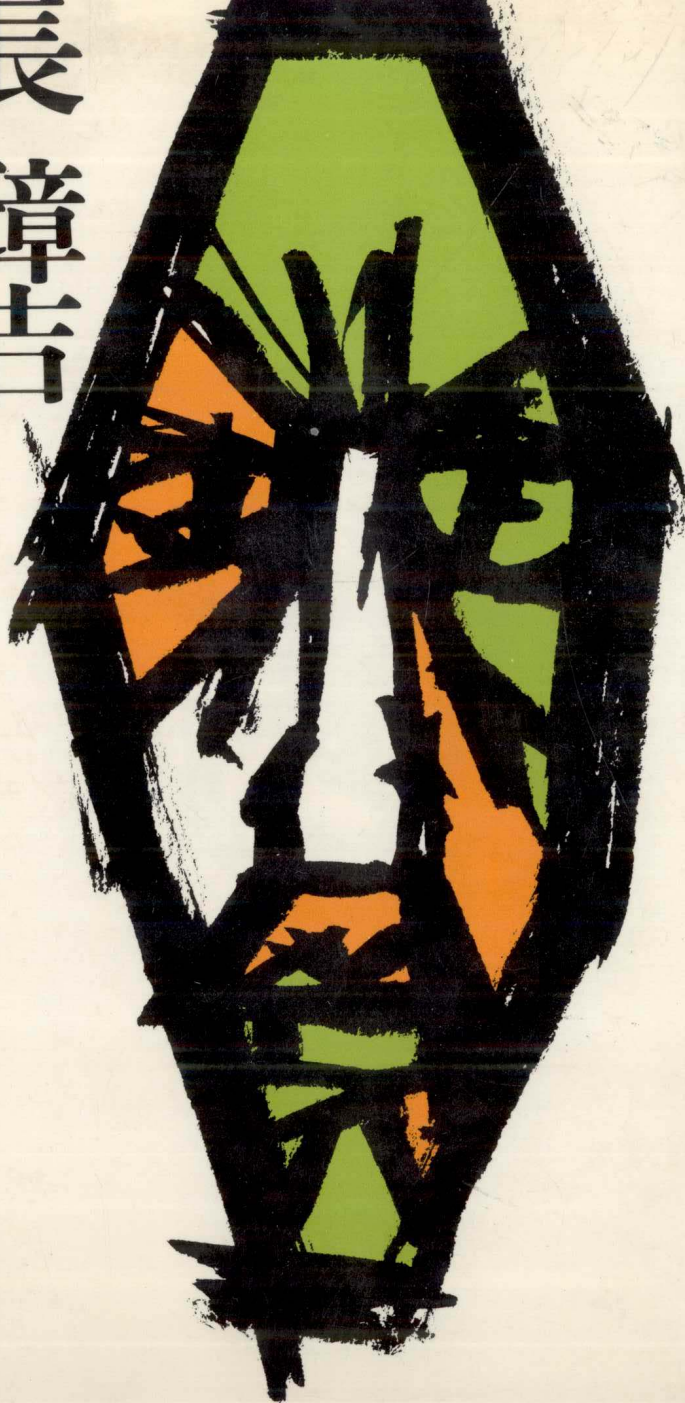


韓国小説を読む

長 璋 吉



草思社

韓国小説を読む

1977 © Shôkitsi Chô



著者との申し合わせにより検印廃止

1977年10月25日 第1刷発行

著 者 長 璋 吉

装幀者 谷 口 正 和

発行者 加 瀬 昌 男

印刷者 山 田 博

発行所 株式会社 草 思 社

〒150 東京都渋谷区神宮前4の24の10

電 話 (470) 6565〜6 振替東京7-23552

印 刷 三陽社／製本 浦野製本

韓国小説を読む
長璋吉

草思社

目次

自然に擬する人間 5

——黄順元「カインの後裔」

第二章の人間 20

——張龍鶴「ヨハネ詩集」

肉体に縛られた人間 49

——孫昌涉「生活的」

生き残った者の倫理 70

——徐基源「前夜祭」

崔仁勲の小説について 90

続・崔仁勲の小説について

克服と和解あるいは夢と世俗の間

114

——金承鉦「ソウル一九六四年冬」

「共有のリアリティ」の危機

147

——朴泰洵「段氏の兄弟たち」

弟世代のためらい

172

——李清俊「書かれざる自叙伝」

行進する馬鹿たち

196

——崔仁浩「恐ろしい複数」

あとがき

221

自然に擬する人間

——黄順元「カインの後裔」

黄順元（ファン・スンウォン）は一九一五年平安南道に生まれ、三九年早稲田第二高等学校を卒業した。三四年東京留学中に詩集『放歌』を出し、四〇年に短編集『沼』を出して以来、作品を発表する可能性が閉ざされていた植民地末期の時代を含めて、現在にいたるまでずっと創作を続けてきた（しかも情性的ではなく）稀有の作家である。

西欧文明の導入以来、韓国の小説は都市、西欧文明の世界と、農村、土俗の世界のふたつのパターンによって認識されてきた。都市的なものを李箱に代表させるとするならば、農村の土俗の世界は金東里によって代表させることができるであろう。もちろんこのふたつの世界を交錯させる作品もあった。啓蒙主義をかばんにつめて農村にくだった李光洙の「土」のような作品もあったし、都市を逃れ、牛にひかせた引越し荷物とともに転がりこんだ農村に、むしろ人生の真実を発見した、李無影の「第一課第一章」のような作品もあった。最近では都市に属しながら都市的でなく、田舎的でありながら田舎でない、都市、農村以外の第三の空間を都市の周辺部に発見し、外村洞と名づけて描いた朴泰洵のような作家もいる。しかしいづれにせよ、このふたつの世界を現代韓国人の意識の重層構造をなすものとして把握することに興味を示したものはなかった。この問題に関心を寄せているのが黄順元であろう。

しかしその意味からいえば、「カインの後裔」は黄順元の代表的な作品というわけにはいかない。そういつた主題が熟するまでには、六八年から七二年にかけて「現代文学」誌に連載された「動く城」をまたなければならぬ。

「カインの後裔」は、一九五三年から五四年にかけて、「文芸」誌に五回連載され、雑誌がつぶれたために中断されたのち単行本として出されたものである。つまり朝鮮戦争直後の雰囲気の中かで書かれたもので、舞台も解放直後土地改革が進行しつつある北朝鮮のピョンヤン近郊の農村に置かれ、黄順元の作品のうちではほとんど唯一といっている政治的状況を取りあげた作品である。主人公はソウルで大学を終え、解放の二年前に故郷であるこの村に帰って、地主であった父親が遺産として残した土地の一部を耕作しながら、夜学を開いているインテリ青年である。この青年地主パク・フンは、熱烈な行動派の理想主義者ではないが、植民地統治の齒車になることを沈黙によって拒否した植民地時代の知識人のひとつの典型に属するといえよう。「カインの後裔」は、パク・フンの眼を通して、この村に土地改革の波が近づき、第一次、二次と改革が進行するにともないつつ変転していく農民、地主たちの姿を、叙情的で端正な文体によって描いている。

星の降りそそぐ晩だった。風がかなり強かった。西北地方の夜気は、まだ凍りつくほどに冷たい三月中旬の頃だった。

サンマクコルの峠を越えてくる男がいた。パク・フンだった。

だいぶ酔っている様子で足元がふらついている。かれはこの四カ月ほどささやかながら意義を感じつつ続けてきた夜学を、きのう党からきた工作隊員に接収されたのだった。なんの予告もなかった。

フンが夜学の時間になっていってみると、すでに見かけない青年が教壇を占領していた。いまこうして酒が過ぎたのも、その空虚感のせいかもしれない。なかつた。

道の右側は急傾斜の開墾地で、左側は松林だつた。この間をひとりを通れるほどの小道が続いていた。夏になればヨモギと蛇イチゴが生い茂つて、ほとんど見えなくなつてしまふような道だつた。

左手の松林がザザと大きな波音をたてた。フンは息苦しいほどこの冷たい風を顔全体に受けた。それでいてかれは、かなり酔いのまわつた意識のうちにも、この冷たい風のなかにもう春にそなえている松脂の香が漂っているのを感じるのだった。鼻をひくひくさせてみた。

これがこの作品の書き出しである。ここにこの作品のすべてが暗示されている。まず「党からきた工作隊員」に夜学が接収されたというできごとが伝えられている。これは、これからじまろうとする社会主義体制への荒々しい変革の予告である。しかしそれが荒々しさそのものとして描かれはしないだろうことは、この村の自然が抑制のきいた端正な文体によつて、清冽に描写されていることから予測される。実際この作品は、工作隊員の手による人為的な変革の過程が描かれる一方、他方に自然（それが農民自身をも含んだものであることはすぐにわかる）が、むしろ作品の中心的柱をなすものとして描写されている。自然こそが、この作品の主人公といつていくくらいなのである。バク・フンは松脂の香を吸いこむように、この自然を呼吸しようとしている。それゆえにかれはほとんど意志的な行動を取らない。自分が酒に酔つていふことすら、「その空虚感のせいかもしれない」と、不明確な表現をしなければならぬ人物である。しかしこの自然は人間を威圧するような自然ではない。人間の通つた跡を、ヨモギと蛇イチゴで被い、癒すようなやさしい叙情的な自然であり、冷たい風のなかに春を準備するよ

うな変転していく自然である。この国の無垢を象徴するものであるといつていい。北朝鮮のある種の屈な小説のなかでも、その描写だけはわれわれを感動させる力を失っていない自然に通ずるものである。「カインの後裔」は、このような自然と急激な人為的変革とのドラマと読むことができる。

バク・フンは故郷に帰ってきてから三年間、烏鵲女と暮らしている。かの女は、フンの父親の代からかれの家の土地を管理しているトソプじいさんの娘で、結婚に失敗したあと、故郷に帰ってきたフンの身のまわりの世話をしている、「燃えるような眼」をもった女性である。フンは外から帰ってくるたびに、家の近くでかれを待っているかの女に「自分にもわからない、ある慰安のようなものを感じ」ており、物語が進むにつれて、かの女のイメージはしだいに大きくふくらんでいく。

フンはかの女と同じ屋根のしたでの生活もあまり長続きはしないという予感をもつ。そして事件はどのように進んでいく。かれはまず夜学を接収され、かれのまわりにはかれを監視している者の影が動きはじめ、かの女の夫も村に帰ってくる。

やがて農民委員長が鎌で心臓を突き刺されて殺されるという事件が起こる。この男は「農民にしては稀なくらい身体の弱い男」で、ただ貧農だということで農民委員長になったばかりなのである。犯人は、バク・フンといっしょに夜学をはじめた仲間のミョングと、それに夜学の手伝いをしていたブルチュリであった。フンは農民委員長暗殺のはなしを従弟のヒョギから聞き、ヒョギの興奮した姿が去ったあと、「悲しみに近い怒り」を感じる。かれがいかなる種類のものであれ、怒りを感じるのはこのとき一回限りである。

この事件のあと、この作品の中心人物のひとりであり、烏鵲女の父親であるトソプじいさんが農民委

員長に任命される。トソブじいさんの家はもとこのあたりの旧家だったが、父親が金鉱に失敗して破産してから各地を転々とし、フンの父親に拾われてその土地の管理をするようになったのである。かれは小作人に對してきわめて非情で、小作人たちは地主よりむしろトソブじいさんを恐れていたくらいであった。こういうトソブじいさんが農民委員長になるにつけては、工作隊の犬皮オーバーの青年から、地主バク・フンとの關係を断つことと地主に對する「無慈悲な闘争」とが要求される。こうしてかれのしだいに狂氣じみていく「闘争」がはじまる。かれはバク・フンが故郷に帰ってきたとき、フンの家を建てる一切の面倒を見てくれた男であり、娘をフンの食事と身のまわりの世話につけたのもかれだったが、しだいにフンと顔をあわせるのも避けるようになり、いまだにフンの世話をしている烏鵲女を狂暴に打ち据えたり、息子のサムドゥギがフンの家の手伝いにくのを罵ったりする。さらに農民大会では、他の誰よりも積極的に斧を振りかざして地主打倒を叫び、自分が発案し指揮して建てたフンの祖父の頌徳碑を打ち壊し、作品の最後の方で悲劇的な死を遂げたフンの叔父バク・ヨンジェの死体に「毒蛇はぶち殺せ」とわめきたてる。

バク・フンはトソブじいさんについてある挿話を伝えている。フンの父親が死んだとき、誰よりも悲しんだのはトソブじいさんだった。年老いた男がこれほど声をふりしぼって悲しく泣くの見たのは、あとにも先にもこのときだけだった。そしてそれは、「自分を認めてくれたひとが、もうこの世にはいないということからくる悲しみかもしれないなかった」「やはり根本的には悪人ではない、単純な人間だ」ということがわかるような気がした」と感想をつけ加えている。

根本的には悪人でありえずして、自分を認めてくれるひとのためには、そのひとに行き過ぎをたしなめられるほど職務に忠実でありえたように（つまり小作人に對してはこのうえなく無慈悲でありえたよ

うに) いままたトソブじいさんは、地主に対して「無慈悲な闘争」に邁進しているのである。

このようなトソブじいさんの変わりようを、バク・フンは「時世(セウォル)歳月」ということばが用いられている)のせい」として受けいれていて、そこにはすこしも非難の色が見られない。歳月に応じて変転する自然のように、人間もまた移り変わっていく、というのが黄順元の人間観である。しかしそういう人間観が自堕落の結果でないためには、この国の自然に対する信頼がなければならぬ。黄順元が植民地末期に農村に軍国主義の末期的症状を避けて過ごした間に、その自然をその国の無垢の象徴として信頼する気もちが培われたであろうことは想像にかたくない。トソブじいさんの変わりざまも、この自然のまえには許されるのであろう。

トソブじいさんの場合は変化の極端な例であったが、この他にも土地改革という季節がもたらすさまざまな変化が見られる。実際この作品は、そういう変化の集積によってなりたっているのである。

各地の土地改革の消息が聞こえてくるにつれて、農民たちの胸もさわめきはじめるが、黄順元は期待と不安のいりまじった農民の動揺する様を的確に表現している。この作品はすぐれた描写を随所に光らせているが、ここはその一例といえるだろう。

土地改革というのが実施されれば、百姓に田畑をただで分けてくれるというはなしは、この五日に法令というのが出されてからいくとも聞いてきたことだった。しかしそれはまるで信じられないことだった。土地をただでくれるだなんて? どの世間にただのものがあるものか。(略)

それでも一方では食指が動かないわけではなかった。田畑が自分のものになる! 考えるほどに胸のときめくことだった。

しかし次の瞬間、かれらは自分になにか望んではならないものを望んでもいるような、後ろめた
い気もちにとらわれるのだった。わけもなくキセルの先で地面を叩いてみたり、手鼻をかんだり、空
咳をしてみたりするのだった。

このような動揺は、地主に対する人民裁判を行う農民大会を迎えて明確なたちをとってくる。農民
大会の描写は、淡々としたむだのない写実的な筆の冴えを見せている部分である。犬皮オーバーの青年
が、人民裁判を宣言して反動地主の名を呼びあげる。

「第一に、すでに数代にわたって数多くの農民の血を搾取してきた典型的な反動地主バク・ヨンジ
エ！」

「そうだ！ 反動地主バク・ヨンジエを打倒しよう」

斧を振りかざして叫ぶ男がいた。トソブじいさんだった。なにかに驚いたような顔が、一斉にその
方に注がれた。うしろの方のひとは、爪先立ちまでしてのぞきこんだ。

犬皮オーバーの青年が、壇上からトソブじいさんをちらっと見おろした。

トソブじいさんはあわてて斧をおろした。いけねえ、早すぎたな、という表情だった。

犬皮オーバーの青年が続けて、

「この反動地主バク・ヨンジエは、日本帝国主義時代に面協議員となり、やつらの手先として働く一
方、日帝末期には上村に貯水池を掘るという名目のもとに、多数の農民の血と汗を搾取した事実は、
われわれの記憶にまだあたらしい！ このバク・ヨンジエをわが民主発展の障害物と規定することに

異議がありますか」

「異議なし！ 反動地主バク・ヨンジュを打倒しよう」

そここに鋤が振りあげられた。だがそのほとんどは、きよう各村から農民たちをひきつれてきた見知らぬ工作隊員たちだった。

こんどは用心深く斧を振りあげたトソブじいさんが、顔を振り向けて自分の村のひとつの顔をながめ渡しはじめた。険しい眼つきだった。なんていっておいた通りに手をあげないのかというのだった。

この眼に出会って、大工のカンとチルソンのおやじが鋤をもちあげた。

険悪になりそうな場面であるにもかかわらず、それに故意に意図しているわけでもないのに、ここにはどこか滑稽味が漂っている。農民たちはかつてないできごとにまだびくりにしているだけだが、トソブじいさんににらみつけられ、犬皮オーバーの青年に「反動に加担したという不名誉な汚名を着てはならない」と脅されて、「たがいに顔色をうかがいながら鋤をあげる者」がすこしずつ増えていく。次にバク・フンの名があげられ、三人目にユン・ギブンの名が呼びあげられたときには、振りあげられた鋤の数もずつと増え、「青い空のしたに鋤の刃がきらめく」のである。みんなが手をあげるのに、自分だけが遅れる必要はないというのだ。「そしてひとびとの顔には驚きと怯えの色のかわりに、なにかえたいの知れない殺気さえ漂い」はじめ、犬皮オーバーにひきいられてバク・ヨンジュの家に肅清に向かったときには、かれらはたがいに目を盗んでカンナやシャベルやゴムグツなどを猫ばばするようにさえる。しかしその様子はのんびりしていて、犬皮オーバーのいきりたった様子に比べると、醜惡どころ

かユーモラスでさえある。シャベルと鋤をかつぱらおうとしている男が、ほかの男に見つかって、どちか一本やらなければならぬと考えていると、その男の腰にゴムグツがはさみこんであるのに気づく。それでそのゴムグツの先をぐいとひとつ押しこんでやって、これでシャベルも鋤もおれのものだと考える、などといったところはとくにそうだ。昔話にでもありそうな場面である。また三番目に名をあげられた地主のユン・ギブンは、説話によくある最後にとちめられる欲張りじいさんの姿を彷彿させる人物である。肩いからせた改革が、こういう郷土的、土俗的雰囲気の中からからかわれている、といったら、それはあきらかにまちがいはあるが、ふとそんな考えを起こさせる要素をもっている。これは改革の推進者がこの土俗的な社会にとって他所者であることによってそうなのであらう。改革は変質される。この土俗的な社会のなから、取り返しのつかないほど他所者に染まった者が出た場合を想定すれば、黄順元のテーマはもうすこし深刻になるはずであるし、冒頭にも触れたようにこういうテーマをあつかうるのは、おそらく黄順元においてはあるまい。しかしここでは、土俗的世界が改革によって根こそぎくつがえされそうに見えながら、逆にそれを抑制する力として働き、その混乱を拡散させて、部分的に滑稽味をかもし出しているということを指摘しておけばいい。

こういう変化を見せるのは、農民たちに限ったわけではない。以前は貧乏人には眼もくれなかった医者者のキムは、土地改革の実行以前に土地を差し出し、烏鶺女が発疹チフスにかかったときには、一度ひと目を避けていやいやながら往診にきたあとは、フンが呼びにいつてもこなくなる。フンといっしょに夜学をはじめた仲間のフンスにしても、民青委員長におさまリ、村のこどもに金を与えてフンの動静を探らせるようなことさえするのである。

このような改革の風に吹かれてころがっていくひとびとの間に、すこしも動揺を見せない人物が三人

いる。烏鶯女とタンソニのおじいさんと、烏鶯女の弟のサムドゥギである。黄順元の自然に対する信頼が、事実上これらの人物によって支えられているのはいうまでもない。ただしサムドゥギについては、かれが信頼にたる人物であるということは作品の一番最後にくるまではわからないようになっていいる。バク・フンを監視していた黒い影のひとつはサムドゥギだったからである。

タンソニのおじいさんは、打倒地主の農民大会で一度も手をあげたことのない人物である。工作隊に問いつめられても「わしにはなにもわからんで」で押し通し、沈黙の拒否の姿勢を取り続ける。そして孫のタンソニがフンスに金をもらってバク・フンと烏鶯女の動静を探っていたことを知ると、老人はタンソニと、そういう孫を育てた自分自身とを鞭打つのである。そこにちようど訪ねてきたフンとの対話に、むかしながらの堅固な人間像が浮かびあがっている。

「誰が悪いのでもありません。みんな時世のせいなんです」

「そうじゃねえ。時世はどう変わろうと、ひとの心はどこへいくもんじゃねえ。人間としてすべきこと、すべきでないことは、古今を通じて変わるはずがないからの」

烏鶯女は、父親のトソブじいさんとともにこの作品中もっとも強烈な印象を残す人間像である。かの女の姿は、主としてバク・フンと夫のチェの眼を通して外側から描かれている。古い忍従タイプの女性の描写に適切な手法といえよう。フンの眼を通じては、かの女は三十まえの成熟した女であることと、なによりも「燃えるような眼」をもっていること、フンに対してはいつも恥ずかしげで、かれのことばにはすこしも逆らうまいという態度を失わないでいることがわかるだけである。バク・フンの眼に映っ

た烏鵲女の姿の意味は、フン自身によつてではなくかの女の夫のチェによつて説明される。チェは農民大会を前後して、二度フンを訪ねるが、その最初のときにかねはフンに次のようなはなしを聞かせる。

「(略)とにかくわたしはあれが嫌いで捨てたのじゃないんです。ただあいつに変な癖があつたものでしてね。嫁にきた日から胸からうえはまるで手を触れさせないんですよ。帯をぎゅつと締めて、したの方よりも大事にしてるんです。最初は恥ずかしがつていただけかと思いましたがね、それがそうじゃないんだ。(略)で、こいつはきつとおれの他に思つてゐる男がいるにちがいないと思つて、それならそいつと暮らせてんで、殴りつけて追い出しちまつたんでさ。(略)いまになつて考へてみると、その他の男つてのがあんただったんです」

絶望的な愛を抱いて身を固くしている烏鵲女の姿は、作中に出てくる富豪の家の息子をしたつて岩になるはした女の説話そのものである。この国の風土のなから生まれた、この国の無垢と純粹を象徴する根源的なイメーヂである。それが根源的なイメーヂであることによつて、烏鵲女から発するベクトルは無垢と純粹へますます向かうほかはない。それが社会的な変動とはまったく絶縁された志向性を發揮するものであることによつて、解放直後のカインの時代の混乱に救いのイメーヂとして存在するのである。これはけつして力ないイメーヂではない。根源的であることによつて「燃える眼」をもちうるのだから。

烏鵲女が発疹チフスで寝ているときに、近所のおかみさんが見舞いにくたと見せて、真鍮製の食器を盗んでいこうとしたときに発する、烏鵲女の防衛的な力の爆発は、農民大会のあと、バク・フンの危機